

令和7年度 県立学校等コミュニティ・スクール推進事業研修会 (みつめなおして、よりよく②) 開催報告

1 趣旨

・学校と地域が一体となって子どもを育む「地域とともにある学校づくり」の充実方策について、コミュニティ・スクール(学校運営協議会制度)の有効的な取組に係る講演や事例発表を通して、県立学校等における円滑かつ効果的な導入や取組の充実に資することを目的とする。

2 主催

滋賀県教育委員会

3 対象

- ・ 県市町立学校 園 教職員
- ・ 「学校を核とした地域力強化プラン」事業担当者
- ・ 学校運営協議会関係者、地域学校協働活動推進員、学校評議員 等
- ・ 社会教育委員
- ・ 社会教育士
- ・ 「地域連携担当者」新任研修受講者(選択研修)
- ・ 行政関係者

4 日時

令和7年7月4日(金) 13:30 ～ 16:30

5 会場

滋賀県庁東館7階大会議室(大津市京町四丁目1番1号)

※対面での参加または、オンライン参加

6 内容

○開会行事

○情報提供

・県立学校地域協働モデル事業について

・情報提供者: 綿谷 駒太郎 氏(愛知高等学校・愛知高等養護学校 学校運営協議会委員、地域コーディネーター)

○講演

・演題: 「県立学校のコミュニティ・スクール～みつめなおして、よりよく～」

・講師: 廣瀬 志保 氏(山梨県立笛吹高等学校 校長、文部科学省 CS マイスター)

○ワークショップ

・テーマ: 「学校運営協議会の重要性」

7 参加者数

99名(来場56名、オンライン43名)

8 講演の概要

情報提供では、「県立学校地域協働モデル事業」について、その実践と地域コーディネーターの役割・重要性について綿谷氏が詳しく説明された。この事業は、県立学校でも地域学校協働活動推進員を配置し、コミュニティ・スクールと地域学校協働活動を一体的に進めようとするものである。綿谷氏からは地域と学校をつなぐ地域コーディネーターが「潤滑油」となり、双方の活性化を図ることを意図して活動していると話が合った。



愛知高等学校と愛知高等養護学校は、令和5年度から「アントレプレナーシップハイスクール事業」を導入し、「地域共学」を理念に地域連携に積極的に取り組んでいると紹介された。

具体的な協働活動として、生徒が商品の仕入れから販売まで行う「起業体験プログラム」を地域のイベントで実施していることを紹介された。これは、以下のステークホルダーにメリットをもたらすと説明があった。

- ・学校：特色ある学校づくりによる入学希望者増加、転学・退学減少、両校間の連携推進。
- ・地域：若者の参加で次世代の担い手が育ち、新たな来場者獲得につながる。
- ・企業：生徒との共同開発で新規顧客を開拓し、CSR活動をアピールできる。

しかし、活動の最大の課題は「継続性」だと強調された。特に、プロジェクト運営費の捻出が難しい資金面と、地域に根ざしたキーマンの不足という人員面が大きな障壁となっていると指摘があった。これらの課題に対し、資金確保には、県や市町との連携による国庫補助金に加え、寄付や民間からの財源確保が不可欠だと述べられた。また、人材面では、地域に熱意を持つキーマンを見つけ出し、巻き込んでいくことが極めて重要であるとお話されていた。事業成功のためには、学校、地域、行政が一体となってこれらの課題に取り組む必要があると話された。

講演では、廣瀬氏から山梨県立笛吹高等学校の取組について話がかった。「学校運営協議会」と「総合的な探究の時間」を教育活動の二つの柱とし、その密接な連携を推進しているとのことだった。

学校運営協議会は令和5年4月に県内4校目として設置され、PTA会長や笛吹市長、大学教授、JA、地域区長など多様な委員で構成されていると説明された。地域や保護者の意見を反映させる役割を担い、生徒と委員による懇談会や保護者向け進学相談会も実施されている。

一方、文部科学省指定の研究開発学校として、教科横断 STEAM 型の「笛吹グローバル」探究活動を推進されている。生徒は3年間をかけ、ミニ探究から個人探究へと進み、「鎌倉街道の歴史活用」や「野生動物との共存」、「買い物難民支援」など地域の具体的な課題を中心としたテーマに取り組んでいる。果樹園芸科の生徒が台湾へのブドウ輸出支援に携わった具体的な地域連携の成果も紹介され、生徒は探究活動を通じて「地域とのつながりの大切さ」を実感していると話された。

学校運営協議会と総合的な探究の時間の強固な結びつきを特に強調された。具体的な例として、委員である地域の専門家は、探究活動におけるワークショップの講師を務めたり、ブドウ輸出プロジェクトのように生徒が地域課題に取り組む具体的な指導や実践の場を提供したりしていると話がかった。生徒が自身の探究活動や気づきを協議会委員に直接伝える機会も設けられ、「探究できる高校」としての広報も協議会の「広報チーム」が担う予定だそうだ。

今後の課題として、「小中学校との継続的な連携強化」や「特色である探究できる高校であることの周知」を挙げられており、これに対し「地域連携」「評価検証」「広報」「生徒育成」の4チームを新設し、組織的に取り組む計画を語られた。このように、笛吹高等学校の学校運営協議会と「総合的な探究の時間」を通して、学校の教育目標達成に向け、学校と一体となって生徒の学びを深め、社会貢献に繋がる人材を育成するための強固な連携体制を築いていることが、深く理解できた講演であった。

ワークショップでは、会場・オンラインともに5～6人のグループに分かれ、綿谷氏のファシリテートで熟議のロールプレイをおこなった。目標を明確化し、“yes and の精神”で対話をすることの重要性を実感する良い機会となった。

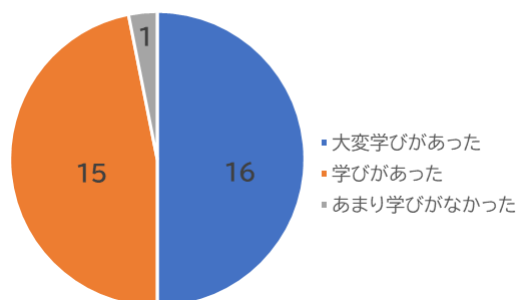


9 参加者のアンケートより

○情報提供

- ・地域コーディネーターとしての仕事内容を、わかりやすく説明していただけて良かったです。学校が地域と一体となりつつあるのが、理解できました。
- ・キャリア教育となる起業体験等、地域の協力を得ながら子どもたちが主体となって進められる活動が良いなと思いました。

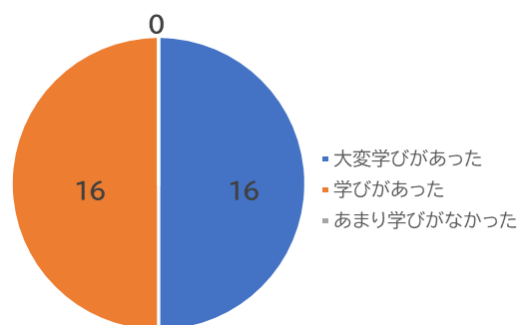
情報提供



○講演

- ・高校の地域協働について、新しい視点を学ぶことができました。
- ・廣瀬先生のお話から、学校運営協議会の持ち方や、次年度への課題をどう具体的に落とし込んでいくか等のヒントが得られました。
- ・高等学校での探究学習を通して生徒の成長や廣瀬先生のマネジメントに感動しました。
- ・生徒自身が興味・関心があることを中心に、とにかく様々な取組をされており、これだけのことができるのだと感心しました。本校でも学校運営協議会の今後のあり方に対して、どうあるべきかを模索していたので、参考にさせていただきたいと思います。
- ・できるかたちで一つ一つの課題を解決しようとする姿勢、体制について、学びが深まりました。

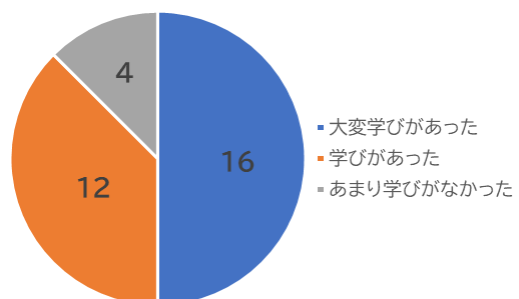
講演



○ワークショップ

- ・コーディネーターの方がおられたこと、ワークショップの進め方があったことにより、前回よりもさらに交流がしやすかったです。特に「このテーマで話し合う」というのが設定されていたのが良かったです。
- ・「熟議」の体験を今後の学校運営協議会に活かし、「対話」を大事にしていきたいと感じました。
- ・それぞれの立場で、率直な意見が出せました。テーマって大事だなと感じました。「yes and」を大事にしたいです！

ワークショップ



10 参加者の質問に対する講師の廣瀬先生の回答

- ① 笛吹高校の学校運営協議会の委員さんが、笛吹グローバル・総合的な探究の時間にどのように関わってくださっているのかを教えてください。

○地域で会わせたい大人との橋渡し。人事異動のある教員が知らない地域の人材を知っており、連絡調整をしていただき、生徒の探究に合致する人材とつなげていただいております。

○授業にも参加していただき、教員と一緒に教室に入り、伴走支援をしていただいております。

○生徒がフィールドワークに出ることも多いですし、班も多いので、教員と同様に相談に乗っていただき、様々な声かけをしていただいております。(なぜそう考えたの？などという言葉がけです。生徒が考えられる種を蒔いていただいております)

○また、CS 委員に中学生対象のオープンスクールに来校いただき、中学生の保護者に対して、地域住民の立場、探究を伴走する立場や保護者の立場から、学校の説明をしていただいております。生徒の探究発表のことやそのプロセス、部活動と学業の両立を保護者としてどのようにサポートしているかなどを中学生の保護者に話してくださっていました。

② 文科省の指定を受けずに学校運営協議会と総合的な探究の時間を推進するには？

○指定を受ける必要はないと思います。本校は探究を軸に教育活動を推進したかったので、研究開発学校の指定を受け、教育課程の特例を研究実践しております。しかし、現状の教育課程でも十分できますし、「総合的な探究の時間」は学習指導要領でも 3 単位から 6 単位となっておりますので、時間を増やすこともできます。学校運営協議会を立ち上げると同様の効果があると考えます。

③ 学校運営協議会を設置したことで、教育活動の上でよかったと感じていることは何ですか？

○多様な専門家であり、多様な立場の方が、真剣に学校の教育活動について考えてくださり、いただくご意見は貴重です。なるほどと思うことも多く、ありがたいです。

○教育活動を進める上で、応援団となっていていただいていることです。学校の課題をその都度相談もしています。多角的に考えてくださり、専門的な立場からアドバイスを頂けます。そのようにできるのは、日常のコミュニケーションを大事にしているからだとも思います。

④ 学校運営協議会に対する教員の理解が深まったことで、生まれた良い変化はありますか？

○地域が身近になったのではないかと思います。はじめは地域連携を不得意とする教員もありましたが、実際の活動を通して地域と連携することで、教育活動に幅ができ探究活動にも深まりが生まれました。探究活動で伴走支援をしたり、思考ツール利用したり、ICT の利活用をしたことによって、授業改善にもつながっています。さらに、生徒が変容していく姿を見て、教員もさらに変容していると感じています。生徒のモチベーションが上がると、教員のモチベーションも上がってきます。

⑤ 学校運営協議会での話し合いが生徒の活動にどのような影響がありましたか

○話し合いの中で方向づけられたことを実践することにより、教育活動が豊かになると考えます。

例えば、探究などの場面で、専門家につないでいただくことにより、生徒の探究に幅や深みが見られるようになります。また、SOSの出し方の研修会を行ったり、教育相談的なことに対してどのように対応したり、整理したりするのがよいかなど、アドバイスをいただいております。危機管理についてもご意見をいただき、自転車置き場から通りに出る際の、地域住民とのヒヤリハット対策などにも積極的に関わってくださいました。まさに学校の応援団です。